

ひ侍るなり

〔大館常興日記〕天文九年十月廿八日、及晚爲御使祐阿來臨、御鷹の鳥にて候由被仰て、うづら一さほ<sub>五</sub>被下之、畏て令頂戴之、一段忝畏存旨言上仕也、

〔奥州波奈志〕貞山公政宗○伊達昔軍の有し頃、京におはせしに、鳥屋のみせに立よらせ給て、よきうづらの有しを、これはいかほどのあたひぞと問せられしかば、鳥やのをとこ、今ぞ高直に申べき時とや思つらん、五十兩也と申上たりしを聞せ給て、

立よりてきけば鶴の音はたかしさてもよくにはふけるものかな、とたゞごとにのたまはせしを、鳥や聞て大にはちて、あたひなしに奉りしとぞ、

〔窓の須佐美追加〕忍侍從忠秋朝臣、鶴を好みて多く集めをかれたり、その比富商世上第一と聞ふる、鶴を持しが、朝臣の御許にまいらせたきよし、立入る御旗本衆に申置けるを、或時おりよかりしにや、其事を申出られたるに、其いらへはなくて、よも山の物語時を移して後、近侍の者を呼て、聚おける鶴の籠を持來てならべよと有しかば、悉くかいづらねし時、其戸を皆開候へとてあけし程に、鶴は不殘飛さりぬ、そこにて朝臣の云、重職の人は物を好む事大なる誤にて有を、今まで心づかで、鶴數多あつめおきしに、さきの富商のよき教をきゝて、今より鶴を好む事はやめぬ、彼に此禮詞をよく傳へてたべと有しかば、申せし人詞なくして出られけり、

〔近世畸人傳〕河内清七

河内の國日下の里に樵を業とする貧者清七といへるものあり、母は富人の家の乳母たりしかば、貧しき世を経ても、口腹のことに儉することあたはず、○中或日母鶴のあぶりものをぞみたりしに、其日は暮たれば、明日朝とぐ起て、市に行てもとめんと用意したる時、窓にあたるもの音せしかば、童どもが戯に、土くれなどうちけるよとおぼえながら、いで、見るに、鶴二羽落て